

## 青森県立高等学校魅力づくり検討会議下北地区部会（第4回）

日時：令和6年11月21日（木）

14:00～16:30

場所：むつ来さまい館

イベントホールA

### <出席者>

下北地区部会委員

山本 隆悦 地区部会長、阿部 謙一 地区部会副会長、小山内 秀樹 委員、  
折舘 渉 委員、坂部 大介 委員、佐藤 俊介 委員、野呂 政幸 委員、  
畑中 貢 委員

### 1 開会

### 2 意見交換

#### 第1 魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方

事務局から資料1の全体構成と資料1「第1 魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 全国的に私立高校は、授業料の実質無償化や先鋭的な学科の設置により子どもたちのニーズへ対応しており、県立高校が苦慮している状況である。  
下北地区内に私立高校は設置されていないが、スクールバスで他地区の私立高校に通学している生徒もいる。  
県立高校についても、私立高校の状況を見ながら、更なる魅力化の方策を考えていく必要がある。
- 多様な生徒が在籍しているため、習熟度別学習は必須であり、具体的な方策についても今後記載していく必要がある。

#### 第2 学校・学科の充実の方向性

事務局から資料1「第2 学校・学科の充実の方向性」の「1 これからの時代に求められる高等学校の魅力づくり」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 特別な支援を必要とする生徒は年々増加しており、特に学習支援が必要な生徒が増えている。小・中学校段階で不登校経験を有する生徒が高校に入学した際、義務教育段階の学習が身に付いておらず、高校の授業についていけ

ない生徒もあり、下北地区では、そのような生徒に向け、退職した中学校長や下北地方中学校長会が勉強を教えているのが現状である。

多様な学習ニーズを必要とする生徒が在籍していることを考えると、これまでどおりの教員の配置では、対応できない部分もある。

- 「(2) 多様な主体との連携・協働」の「①高等学校間・学科間の連携」の3つ目の○に、「これまでの枠組みにとらわれない各地区や県全体の高等学校間の連携を推進する必要がある」とあるが、現在、重点校・拠点校が取り組んでいる連携が不十分のため、今後更に推進していく必要があるという意見なのか。
- (事務局) 検討会議では、重点校・拠点校の連携において成果がある一方で、課題もあり、その枠組みに当てはめずとも、各校の主体的な連携を推進できるような体制づくりが必要であるという意見であったと認識している。
- 現在の記載では、これまでの重点校・拠点校制度が失敗であったと読み取れるため、表現を工夫した方が良い。
  
- 令和10年度以降も重点校・拠点校という枠組みを継続していくのか。
- (事務局) 検討会議では、重点校・拠点校制度を継続するか、しないかといった具体の対応は言及していない。

事務局から資料1「第2 学校・学科の充実の方向性」の「2 これからの時代に求められる力を育む学科等の魅力づくり」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 工業科について、どのような学びをするのかは分かるが、その学びを通して育成された人財が、地域に対してどのように貢献できるのかといった具体的なイメージが分かりづらい。
  
- 経済が本県の課題の一つであることを踏まえ、経済や経営を学べる学科を設置し、起業できる人財を育成することも考えられる。  
また、県立高校の中には、1年生の段階で、医師を希望する生徒が100名近くいる高校もあったことから、学力が高い進学校へ医師を目指す医師コースを設置することも考えられる。

- 他県では、小学科の募集人員を25名としているところもある。生徒のニーズや、学びを生かした地域への貢献を考えると、各小学科を県内に1校ずつ設置し、少人数とすることがよい。現代はICTが発達しているため、他校とのリモート学習で単位修得を保障するとともに、実技・実習は、集中実習により対応することで、専門学科の単位修得や資格取得にも取り組めるようになる。
- 全国的に、定時制課程の3部制の中で最も生徒のニーズが高いのは、午後部であり、本県も同様である。一方、最もニーズが低いのは、夜間部であり、田名部高校には、夜間部のみ設置されている。これまでは日中に仕事をし、夜間に学習する生徒が多かったが、現在、日中に仕事をしている生徒は少ないことから、全日制の授業を併修できる制度があればよい。  
また、生徒によりきめ細かな指導をするためには、午前部、午後部、夜間部の3部制とすることも考えられる。  
さらに、定時制課程では、生徒の多様化により、現在の教員配置では対応できない部分もあることから、教員配置や募集人員について配慮してほしい。
- 資料全体を通して、高校に求められる魅力は、大人から見た魅力であり、こどもから見た魅力とは異なっている。今後は、こどもから見た魅力の視点からも検討を進めていく必要がある。
- これらかの時代はどの分野でもグローバルな力や英語力が共通して必要であるため、グローバル探究科は、学科として必要なのか疑問である。

事務局から資料1「第2 学校・学科の充実の方向性」の「3 学校・学科の魅力づくりに向けた教育制度」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 入学者選抜において現在一部の高校で実施しているくくり募集について、入学後に併置されている別の学科に転科したい生徒もいることを踏まえると、くくり募集を実施していない複数学科が設置されている高校において導入を検討すべき。
- 定時制を受検する生徒は、小・中学校段階で不登校経験を有する生徒も多いことから、他県ではチャレンジスクールを設置した上で、入学者選抜は、学科試験ではなく、中学校の評価等で判断するということが行われている。このような事例も参考にしながら、本県でも学力に捉われない選抜方法が必要である。

- 中高一貫教育によるメリットはどのようなものがあるのか。  
→ (事務局) 数学や英語の先取り授業により、高い進学実績に結び付いている。

### 第3 学校配置の方向性

事務局から資料1「第3 学校配置の方向性」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 定時制課程には多様な生徒が多く在籍するため、1学級当たり20人程度の学級編制であれば教職員も対応できる。  
学級編制の人数は法律で決まっているが、本県特有の条例を作るなど、少人数学級編制を推進し、きめ細かな指導により質の高い教育を提供し、このような取組を県内外にPRしていくことも必要である。
- 1学級の編制人数の見直しが必要である。具体的には1学級20人の学級編制とすることで、小規模校を存続することにつながり、生徒一人一人の高等学校教育を受ける機会の確保が可能となる。
- 工業高校は実習があるが、多様な生徒が入学している中、安全に実習を行うためには、これまでと違った対応が必要である。法律で教員定数は決まっているが、県でこのような事情を把握した上で教員配置をしてほしい。
- ICTを活用すれば小規模校、定時制・通信制課程の高校を配置する必要がないのではないかと。  
生徒のウェルビーイングの実現のためには、授業を受けるだけでなく、学校に通い人間関係を構築することなども必要であり、高校にはこのようなことが求められている。  
このことから、ICTの活用と学校配置の方向性については、分けて考える必要があり、ICTをどのように活用していくべきか、慎重に検討していく必要がある。
- 資料全体を通して「多様性」とあるが、学校現場と魅力づくり検討会議の意見とでは認識にズレがあると思う。各校の校長先生に、1学級当たりの人数を決めさせるなどの権限を与えることで、各校はより充実した教育環境を提供できるのではないかと。  
1学級当たりの人数を減らすことにより、教員配置やそれに関する予算等様々な課題はあるが、各校の魅力づくりのためには、大胆な取組が必要である。

#### 第4 地域等の理解と協力の下での魅力ある高等学校づくり

事務局から資料1「第4 地域等の理解と協力の下での魅力ある高等学校づくり」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 魅力づくり検討会議では、大人たちから意見を聞いているが、各校の生徒から自分が通っている高校を更に魅力ある高校にするためにはどうしたら良いかという意見を聞くことで、生徒目線で考えることができるのではないか。
- 来年2月の検討結果報告に向け、優先順位を付けたり、取組の開始時期などを示すのか。  
→（事務局）検討結果報告に向け、地区部会や地区懇談会でいただいた意見も踏まえ、1月の検討会議で議論を深めていくことになる。優先順位等を付けることは現段階で予定していないが、検討会議の中でそのような話題が上がれば、方向性に強弱を付けていくこともあり得る。  
取組の開始時期等、具体的な対応については、検討結果報告を受けた後、県教育委員会で検討していく。

### 3 閉会